

飼料計算はあたらなくとも良い、はずれなければ

飼料計算はどの牛群のどの牛をターゲットにして計算をするのか？初産牛群がいれば、初産牛群として計算するべきであろうが、それほどの数のTMRを作成する労働的余裕はあるのであろうか？泌乳初期に合わせれば、泌乳末期は太り出す。泌乳末期に合わせれば、泌乳初期は栄養不足で、ケトージスや繁殖障害になり易い。

飼料計算は、泌乳初期から中期までにターゲットを与えて、分娩が多く重なれば泌乳初期に移動し、やがてそれが中期に移動すれば、中期をターゲットにして設計する事を考えます。何処を中心として設計するかにより、その評価も違ってきます。すべての牛を満足させる事は出来ませんが、より多くの牛をターゲットに出来るように考えます。

泌乳初期牛は痩せてくる傾向があるかもしれません。少しの辛抱で、その痩せる傾向が収まるようであれば、良いかもしれません。繁殖がキーポイントになる可能性が高くなります。早く受胎してくれれば、太る事もなく乾乳になり得ますが、繁殖が悪ければ、次第に太る牛となります。飼料計算の狙った群の状況が満点でなくとも、大きく外れなければよしとします。

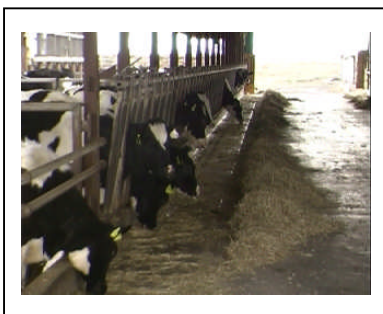
飼料計算の数値よりも、如何にして乾物摂取量を増やすかが大きなポイントになります。薄い餌でも、多く採食してくれれば、栄養は充足されます。乾物摂取量を制約している原因を捜す事が、最も良い事かもしれませんが、つい飼料計算値に深入りをしてしまう傾向があります。

1%の数値よりも、1kg多く食べさせる事が、上手く行くコツです。
あたらなくとも良いが、外れない。後一口食べさせる。これがポイント。



朝一番の飼槽の状況

残飼が全くなく、TMRの量が完全に不足している。
飼料設計以前の問題がある。



食べたくとも食べられない乾乳牛

餌寄せがなく、牛の目の前に餌があるにもかかわらず食べられない状況。ストレスが大きくなると共に、乾物摂取量は上がらない。結果として栄養の問題が生ずる事になる。